

研究主題 『自分に挑み 未来を拓く』 ために人間としての 在り方生き方を深めていく」

埼玉県立大宮商業高等学校

1 研究主題の設定理由

本校は単独商業高校であり、生徒の7割前後が就職希望者である。17歳・18歳の生徒が自分の能力や適性を見極め、進路選択を行っている。そのため、継続的な進路指導に外部講師や卒業生からの体験談で情報を得ながら、自分にあった進路先を決定している。本校での3年間を系統的に、「自分の生き方」を考えさせ、主体的に自らを律する力や主体的に判断し行動する力を育ませ進路設計（人生設計）の一助となるよう、研究主題とした。

2 研究の仮説

自らの人生観や価値観を深めていくことが、進路選択や人生設計にどう関連しているかを考えさせる。

3 研究の経過

【今年度の実施計画】

- 4月 職業適性検査や心理検査を実施し、自らを知る機会とする。
- 6月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用する。
- 7月 職業適性検査や心理検査の振り返りを行う。
- 10月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用する。
- 11月 進路講演会
- 12月 「在り方生き方教育」教材「明日をめざして」を使用する。
- 1月 インターンシップを通して職業観や勤労観の育成を図る。
- 2月 進路分野別ガイダンスを通して、自らの能力適性を確認する。
- 3月 インターンシップ発表会を実施し、自己と向き合う機会から自分の生き方を考えさせる。

今年度も新型コロナウイルスの影響で、年度当初予定が計画どおりに進むことはなかった。1月実施予定であったインターンシップの中止、2学期当初の分散登校及び修学旅行延期に伴うLHR計画の大幅な変更。ありとあらゆる場面で、あらゆることに変更が生じ再度検討を求められることが多くあった。その度に、状況把握や新たな計画準備、適切な判断がせまれ、日々の業務さえ落ち着いて遂行することができない1年であった。正直、道徳教育研究推進モデル校としての使命を全うすることができず大変申し訳なく感じている。

4 研究の内容

(1) 望ましい勤労観・職業観の育成

本校生徒は多くの生徒が卒業後就職する。そのため、在学中に望ましい勤労観や職業観を育み産業人として社会で活躍できるよう取り組んでいる。2学年では進路行事を中心に、自己理解を深めることや将来に向けてのロードマップを作成し「自分の生き方」を考えさせている。

主体的に自らを律する力や主体的に判断し行動する力を育ませながら「自分の生き方」を考えさせるには、日常生活の積み重ねが重要である。時間を守る、挨拶をする、身嗜みを整えるなど、当たり前のことを学校生活の中で徹底させることで自然と自分自身と向き合うことが出来るようになる。自分自身を客観的にみつめ、その自分と向き合うことで初めて「自分の生き方」を模索できるようになる。設けられた「在り方生き方教育」の時間や進路講演会などは情報収集する場やきっかけにすぎず、その時間で「在り方生き方」の育成などできるはずもない。だから、日々の生活の中で生徒の意識を醸成することが何よりも重要であり、そのチャンスは学校生活のありとあらゆる場所にある。教科指導、生徒指導、学校行事、日々の挨拶、何気ない会話など、日々の生活の中に「在り方生き方」の育成の根幹がある。

【 年間進路行事計画 】

6月	職業適性検査実施
7月	職業適性検査振り返り
11月	進路講演会
1月	3年生による進路体験発表会 インターンシップ
2月	分野別進路ガイダンス

— 職業適性検査 —

6月には、職業適性検査を行った。卒業後に就きたい職業や自己の適正を把握するために実施した検査である。2学年生徒は、将来に対する考え方が希薄であったり、望ましい職業観や勤労観が乏しい生徒が多く見受けられる。将来に対して「どうにかなるだろう」、「先生方や両親がどうにかしてくれるだろう」といった受け身の状態である。主体的に将来を見据え、自ら人生を切り拓いていく力強さが感じられる生徒は皆無である。検査を実施することと職業適性検査の振り返りを行うことで、新たな得意分野の発見や将来に対する意識の変革が期待できる。

— 進路講演会 —

11月には、外部講師による進路講演会を実施した。講演では、進路全般に関わる心構えや今取り組んでおく必要があること、先を見通して計画を立て準備しておくことの大切さを1時間で講演していただいた。その後、就職希望者と進学希望者に分かれ、近年の進路状況や具体的な試験対策等の講演を拝聴した。就職希望者も進学希望者も実際

の試験内容や試験方式を聞くことで、自らの進路意識の高揚を図ることができた。



— 3年生による進路体験発表会 —

1月には、3年生による進路体験発表会を実施した。2年生の各クラスに就職内定者6名、大会議室に大学進学内定者6名、視聴覚室に専門学校進学内定者6名に集まっていただき3年生各生徒の進路活動体験を発表してもらった。発表会の進行役は2年生の進路係が行い、生徒主体で発表会が行われるように工夫した。発表を聞いたのち、2年生から積極的に質問を行うことで、進路体験の話しを掘り下げて何うことができ大変貴重な時間となった。3年生の実体験は、大変重みがあり生徒も身近なこととして受け止めることができたようである。

【 2年3組HR：就職 】



【 視聴覚室：専門学校 】

【 2年5組HR：就職 】



【 大会議室：大学・短大 】



(2) 帰属意識の醸成

昨年度は、多くの学校行事が中止・縮小されたことで集団に対する帰属意識を醸成することが大変難しかった。何かと他人事のように振る舞ったり、集団の一部を構成している自覚が希薄であったりなど集団に対する帰属意識の芽生えが低く感じられた。

今年度は、体育祭・文化祭・遠足などの各行事を生徒主体で運営していくことで、自己肯定感が高まる生徒や周囲に気を配ることができる生徒、仲間を助けてあげられる生徒などが多く見受けられるようになった。このような帰属意識の醸成を図ることが自らを律し自立していく気持ちを育ませると考えている。研究主題にあるキーワードの「自分に挑み 未来を拓く」ということは、基本的な高校生としての自主自立ができているということが大前提であると考えている。

5 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

昨年度から2年間研究を重ねることで改めて実感したことは、日常の学校生活の積み重ねがいかに大切かということである。この2年間は、ある意味日常を奪われたかたちで日々が過ぎていき、当たり前前が当たり前前実施されずに常に計画変更を余儀なくされた。また、楽しみにしていた行事が直前で中止や縮小され、生徒教員共にやりきれない思いや余計な気苦労が絶えなかった。その中でも一つ一つ出来ることを実施していくことで、少しでも自ら道を切り拓き、主体的に考え行動できる生徒を育成し進路意識の向上や職業観、勤労観の育成に繋げていくことを考えた。成果については来年度の生徒の様子を見なければ分からない。

(2) 研究の課題

「自分に挑み 未来を拓く」ために人間としての在り方生き方を深めていくという本校の研究主題のクライマックスは2年の3学期に実施されるインターンシップである。1・2年次にバーチャルの世界で積み重ねた職業観や勤労観を企業という実社会にでて「働く」を体験することで、さらに職業観や勤労観を深めたり、ある生徒にとっては職業観や勤労観の捉え方が根本的に変わったりすることがある。その経験を経ることで3年次の進路活動をより主体的に取り組みさせることができる。しかし、今年度は新型コロナウイルスの影響によりインターンシップが中止となり、その経験をさせることができなかった。代替の行事も検討したが、日程や他の業務との折り合いから実施することができなかったことは大きな反省点である。また近年は、新しいライフスタイルの在り方や多様性を求める時代など、大きな変化が日常生活で起こっている。よって、職業高校の在り方自体何が正解なのか、社会からどういった生徒を育成することが職業高校の教育に求められているのか、そのようなことを模索しながら、新しい商業高校の在り方を検討していかなければ、生徒の主体性を育んだり、望ましい勤労観、職業観を育むことは難しいのではないかと考える。教育には「不易と流行」という言葉があるが、不易と流行という言葉の狭間に立たされ、玉虫色の教育を行っている教育活動の場としての方向性や学校の教育理念がくすんでしまう。大宮商業高校として、どのような生徒を育成し社会に輩出していきたいかを考えなければならないと考える。